

# ワカメのベビーリーフとハバノリ等の養殖技術開発

(ワカメのベビーリーフとハバノリの海面養殖技術開発と特産化研究事業)

吉田太輔・原 勉<sup>1</sup>・寺谷俊紀<sup>2</sup>

## 1. 研究目的

本研究では、ハバノリ養殖技術開発および小型ワカメの早期収穫技術開発（ベビーリーフ）を実施する。ベビーリーフとは、ノリ網を使用して効率的に生産する小型ワカメの仮称であり、生鮮ワカメの出荷盛期前の高単価が見込める時期（12月～1月上旬頃）の出荷を目的とするものである。

## 2. 研究方法

### (1) ワカメのベビーリーフ、

種苗生産はフリー配偶体法で行い、配偶体（県内産養殖ワカメ由来）はインキュベーター内（20℃、2000～4000Lux、12L:12D）で培養したものをを用いた。採苗は9～11月に3回実施し、配偶体をノリ網（試験網：縦1.5m×横3m、目合30cm）に付着させ、100～5kℓ水槽に收容した。採苗後は止水通気培養とし、培養期間は3～5週間程度であった。培養海水には栄養塩（ポルフィランコンコ、第一製網製）を添加した。

海面養殖試験は、出雲市河下地先に設置した延縄式の養殖施設（長さ100m）において実施し、試験網の垂下（沖出し）は10月14日、26日、11月14日の計3回行った。網の垂下深度はいずれも1m（上端）～2.5m（下端）とし、沖出し後1ヶ月に2回程度の頻度で各試験網における葉体の生長・生残状態を観察した。

### (2) ハバノリ

県内産ハバノリ由来の配偶体を用いてワカメのベビーリーフとほぼ同様の方法で種苗生産、海面養殖試験を行った。

## 3. 研究結果

### (1) ワカメのベビーリーフ

種苗生産では、採苗後1週間程度で芽胞体が形成され、3～5週間後に全長1～3mmサイズに生長したところで沖出しを行った。

海面養殖では、沖出し後は各沖出し分ともに

芽落ち等は見られず、12月中旬まで生長も良好で順調に推移した。しかし、12月下旬～1月上旬は時化続きのため調査が実施できず、波浪がおさまった1月26日に調査を実施したところ、養殖施設の破損（幹縄の切断）が確認された。施設破損の原因としては、悪天候により収穫が遅れたことで、試験網等の抵抗が大幅に増加したことが影響した可能性が考えられた。

試験網のワカメの平均全長および網1枚当たりの収穫量は、沖出し1回目分、2回目分は各々、102cm、13.6kg、115cm、11.2kgであった。網1枚当たりの収穫量は昨年度より高い値であったが、漁業者が実施した市場への試験出荷における単価は、約200円/kgと前年度（1月中旬出荷、約1,000円/kg）より大幅に低い値となった。これは収穫時期が遅れて養殖ワカメの出荷盛期と重なったことが原因であると考えられた。なお、沖出し3回目分の試験網については施設の破損により回収できなかった。

また、前年からの課題であった収穫作業の省力化については、桑爪を用いる等の改善を行ったが十分な作業時間の短縮は出来ず、課題の残る結果となった。

### (2) ハバノリ

種苗生産では、採苗後1～2週間程度で葉体が形成され、3～5週間後に全長1～3mmサイズに生長したところで沖出しを行った。

海面養殖では、各回沖出し分とも12月上旬までは網全体に葉体が繁茂し、平均葉長が6～8cmと順調に生長したが、12月下旬から成熟が進み葉体が枯れた様な状態となり、葉体の脱落が目立つようになった。その後、ワカメと同様に施設が破損したため、葉体の収穫はできなかった。

## 4. 研究成果

調査で得られた成果は、出雲市わかめ養殖研究会ハバノリ検討会で報告した。

1 出雲市わかめ養殖研究会

2 松江水産事務所